音　楽

新たな音楽の価値を創る子

―音や音楽と自己、他者との関わりを編みなおすプロセスを通して―

音楽科
新たな音楽の価値を創る子
―音や音楽と自己、他者との関わりを編みなおすプロセスを通して―

悴山　恵

指導要領の「見方・考え方」に基づく授業の型が確立されつつある中で、そこから抜け落ちてしまうものはないだろうか。「何を教えることができて評価することができるか」という観点による学習内容の設定から脱却し、子供の思いや問題意識を出発点とし、共に解決に向けて取り組んでいくような主体的に学んでいく子供の姿を目指したい。今年度は、音楽科の本質的な学びを吟味した上で、子供が自分の学びを価値づける過程での①音や音楽と自己、②音や音楽と他者、③音や音楽を通した自己と他者との関わりを考えていく中で、音や音楽をモノとして捉えるだけでなく、背景にある人とのつながりや生活、文化などに目を向けられるようなコトとしての音楽の学びのプロセスを構想した。

Ⅰ．音楽科の研究テーマ

(1)問題意識など

①音楽科の課題

本科学技術の発達により子供たちを取り巻く音楽環境が変化している。音楽の授業では AI 作曲アプリの登場で、音楽を演奏したりつくったりする技能が乏しい子でも、アプリの項目から選択していくだけで自分の音楽をつくることができるようになった。このように技術の進歩によって音楽の技能面が補われていく一方で、AI がつくった音楽をどう感じたか、自分の思いやイメージするものに近づけるにはどうすればよいか、といった思考、判断して表現する力がより一層重要になっている。

近年の音楽科の授業実践は「学習指導要領」との関わりのなかで、「音楽を形づくっている要素」に焦点化した「知覚と感受」を軸とする展開といった一定の「型」が確立されつつある。それらは「西洋音楽美学的な音楽の捉えである」と樫下らは述べ、そのような「型」があることによって、そこから抜け落ちてしまうものがある可能性を指摘する。(樫下 2022)また、子供たちが何を選択してやるかという面からではなく「何を教えることができて評価することができるか」という観点から音楽活動を決定しているカリキュラムの問題も指摘されている。教師が計画した枠組みの中でのみ子供に活動させ評価するといった授業では、子供が自分で学習内容や方法を選択する余地がなく、子供の主体的な学びにつながらない。子供の問題意識から課題を設定したり、子供が自ら課題を見いだし課題を解決する方法を考えるたり、自己の学びを意味付けて次の学習へとつなげていくことを通して、主体的に学んでいく子供の姿を目指したい。今改めて、味わうべき音楽科の本質は何なのか、どのようにして味わうのか(プロセス)、そしてどのように子供が学びを実感し次の学びへつなげていくのか、を問い直す必要性を感じている。

②児童の実態

アンケート調査により、授業以外で子供たちが触れ親しんでいる音楽はより一層多様になっていることが分かっている。それは、インターネットやストリーミングサービスの普及による音楽の聴き方や、YouTube や TikTok などのソーシャルメディアの影響が表れていると考えられるが、音楽への関わり方はより個別化しており、子供同士で共有する機会はあまり設けられていないのが現状である。そして、それらの子供が授業以外で触れ親しんでいる音楽と授業で学ぶ音楽とが乖離しており、別々のものとして捉えている子供の姿が見受けられる。つまり、子供にとっての音楽が「学校の音楽」と「学校外の音楽」に分けられていて、それらをつなげたり結び付けたりする捉え方をしていないのである。それは、学校で学ぶ音楽が学校で閉じたものとなっており、学校外の子供たちの生活に意識が広がっていないことを意味している。

学習指導要領では「児童が音楽的な見方・考え方 を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する」ことを音楽科の目標に掲げている。学校で学ぶ音楽が学校で閉じたものとなっていては、生活や社会の中の音や音楽に目を向け、子供が生涯に渡って音楽に親しみ続ける素地を養うことはできないと考える。学校の授業を通して子供の音楽の捉えである音楽観を揺さぶり、学校の外へと広げたり深めたりしながら更新できるような音楽経験が必要であり、そのような子供たちの意識も必要である。メディアの発達によって音楽にアクセスすることは容易

になった。学校の音楽の授業でしかできないことは、それぞれの音楽的背景を持つ子供たちが、それらを持ち寄り、共有し、思いや意図を交流することを通して、ともに音楽することでしか経験できない音楽の価値を見いだしていくことなのではないだろうか。子供が音楽を通して自己、他者との関わりを往還する中で、新たな音楽世界を自ら切り拓いていく姿を目指したい。

(2)テーマ設定の理由

①テーマ：「新たな音楽の価値を創る子」とは

本校の全体研究テーマである「学びを創る」とは「一人一人の子供が、各教科等の本質的な学びを味わい、自らの学びを価値付けること」である。そこで音楽科部では「新たな音楽の価値をつくる子」を研究テーマに設定した。子供が音楽の学びを価値付けるためには、音楽をどのように捉えるかという音楽観に基づく価値観が重要である。それは子供一人一人違っており、音楽経験を通して変化し得るものであると考える。これまでにない価値観を生み出すこともあれば、これまで持っていたものに肉付けしたり、改変したり、ときには以前のもの戻ったりすることもあり得る。したがって「新たな音楽の価値を創る子」とは、子供が音楽を通して生まれた価値観で自らの学びを価値付けすることにより、自分にとっての音楽の価値が変化し、音楽観が更新されていく子供であると考える。

②サブテーマ：「音や音楽と自己、他者との関わりを往還しながら学ぶプロセス」とは

「学びを創る」ためには「本質を味わう学びのプロセス」が重要である。学習指導要領解説編によると「音や音楽は、『自己のイメージや感情』、『生活や文化』などどの関わりにおいて、意味あるものとして存在している。」という。つまり、音や音楽を物理的な「モノ」として扱うのではなく、自己との関わりや生活や文化との関わりの中で経験的に学んでいく「コト」としての音楽の学びが重要であることを示唆している。学習指導要領の「見方・考え方」には、音楽を通して捉えたことを「自己のイメージや感情」と関連付けることと、「生活や文化など」と関連付けることが並列に示されているが、両者の間には少し飛躍があるように感じる。そこで、その間を取り持ち、懸け橋となるのが「他者との関わり」であると考える。自分がその音や音楽をどう捉えどう感じたのかといった①自己との関わり、音や音楽の背景にある人間の営みである生活、文化の側面から音楽を捉える③生活や文化との関わりの間に、ともに学ぶ仲間が音や音楽をどう捉えどう感じたのかといった②他者との関わりが入ることによって、音楽の捉えが①の自己との関係に閉じたものにならずに②の他者から③の生活や文化との関わりへと意識を向けやすくなるのではないか。そして、これら３つは一方向に直線的に段階を踏んでいくのではなく、相互に往還しながら学ぶプロセスであると考える。鳴り響く音の分析で音楽を表面的に捉える活動に終始するのではなく、音や音楽と自己、他者とその背景にある生活、文化などとの関わりの段階を往還しながら学ぶことで、音楽本来の「コト」としての学びが可能になり、音楽の本質を味わうことにつながると考える。

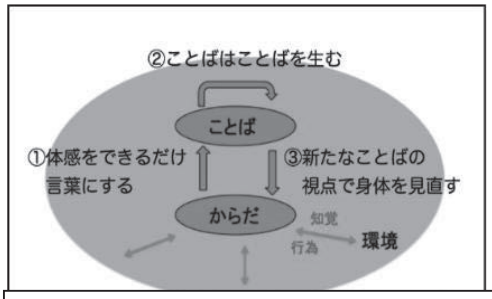
２．全体研究テーマとの関連

(1)音楽科の本質の吟味

①本質Ⅰ(個別知識・技能を統合・包括する鍵概念)

音楽科の本質Ⅰは、学習指導要領に示される「見方・考え方」の「見方」と同義に捉えるならば、「音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること」である。この視点は、音楽科の学習が成立するための前提である「音楽に対する感性」を働かせることを不可欠とする。しかし、樫下(樫下 2022)が指摘するように、この捉え方は西洋音楽美学的な枠組みに限定されている可能性がある。

菅(菅 2022)は、音楽の意味や表現性を形式的構造に求める立場を「脱身体的な音楽認識」と批判し、エナクティビズム認識論や「からだメタ認知」の観点から、創造的な音楽活動には身体的体感と内的衝動が響きの目標そのものを変容させていく相互作用的・循環的プロセスが不可欠であると述べている。学習指導要領における「音楽に対する感性」が「音楽的刺激への反応」や「音や音楽の美しさを感じ取る心の働き」と説明されていることを踏まえると、音楽科における本質Ⅰは身体性の理論を抜きに語ることはできない。そこで、諏訪の「からだメタ認知」の理論を援用する。諏訪は「自分の身体が感じていること(体感)をことば化することによって新たなことばの観点でからだを見直すことが可能になり、身体が為す行為や体感も進化する。更にことば化できる事柄も進化する」と述べる。(図Ⅰ　参照) この「ことば化」は、音楽学習においては言語だけでなく、音や音楽、身体の動き、表情、オノマトペ、さらには言語化しにくい感覚的表出も含



図Ⅰ　諏訪によるからだメタ認知の図

音楽

む広い概念として捉えられる。これらの表出を「音楽的な視点」で捉えることが、本質Ⅰの中核である。

したがって本質Ⅰは**音や音楽に対する心身の反応から得た、音楽を形づくっている要素とその働きの視点**、であるといえる。

②本質Ⅱ(その教科等ならではの認識・表現の方法)

音楽科の本質Ⅱを学習指導要領に示される「見方・考え方」の「考え方」と同義に捉えるならば、「(本質Ⅰで) 捉えたことと自己のイメージや感情、生活や文化などを関連付けること」といえる。ここでも本質Ⅰと同様に、「音楽に対する感性」を働かせることが前提となる。

諏訪の「からだメタ認知」の理論を踏まえると、音楽学習における表現は、音や身体の動き、表情、オノマトペなど多様な形で「ことば化」される。これらの表出を音楽的な視点で捉え直し、思考・判断を重ねながら新たな表現へと編みなおしていく過程が、音楽科における独自の認識・表現の方法である。

本質Ⅱでは、本質Ⅰで得た視点を基盤に、①自己のイメージや感情と結びつけること、②生活や文化との関連を見いだすことに加え、音楽科の学習の基盤である③他者との関わりを通して表現を再構築すること、を重視したい。つまり本質Ⅱは、本質Ⅰの視点で捉えたことを**①自己のイメージや感情、②生活や文化などと関連付け、③他者との関わりを通して編みなおすこと**といえるだろう。**音楽を捉える視点を自己・生活や文化・他者との関係の中で編みなおし、新たな表現へとつなげていく音楽科固有の認識・表現の方法であるといえる。**

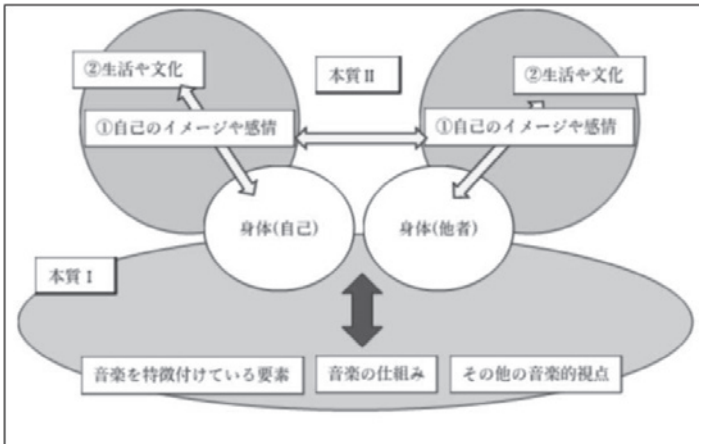


図２　音楽科における本質Ⅰ、Ⅱの関係

右に、本質Ⅰ、Ⅱの関係を図２に表した。

(2)一人一人が本質を味わう学びのプロセス（省察的課題への支援）

① 本質的かつ個別的な課題設定

音楽科の課題で述べたように、教師が決めた枠組みで子供に画一的な活動させるといった授業では、子供が自分で学習課題や方法を選択する余地がなく、子供の主体的な学びにつながらないと考える。子供一人一人の課題意識から学習内容や方向性を決めて学習を進めていく、主体的に学んでいく子供の姿を目指したい。

例えば、器楽合奏をする活動一つをとっても、子供一人一人にとっての課題は様々である。既に自分のパートの演奏が仕上がっている子にとっては「合奏全体をよくするにはどうすればよいか」という視点で課題設定するであろう。自分のパートの演奏がまだ仕上がっていない、まだ譜読みや練習段階の子は、「どうすれば自分のパートの演奏が仕上がるだろうか」という課題設定をするだろう。こういった場合、学級全体で目指す方向性は同じだとしても、個人個人がその時間に取り組みたいことは異なるはずである。そこで、個別の課題設定が必要になってくる。「今日はみんなでここまでできるようにしよう」といった同じ目標を掲げるのではなく、子供一人一人が自分の実態に合った課題設定をして達成に向けて取り組む機会を設けることで、子供一人一人が主体的により切実感を持って学べるであろう。

②多様な解決過程を支援する学習環境

子供一人一人にとって課題解決の過程が様々であるように、解決過程を支援する学習環境にも個々に応じた工夫が必要である。例えば、リコーダーで「旋律の特徴に合った吹き方で演奏する」という課題の場合、奏法から確認する子、最初に曲全体を聴いて旋律の特徴を捉えようとする子、運指を確認する子、といった様々な解決方法が考えられる。個々の子供の解決に向けたプロセスを支援できるような参考音源や動画、運指表や音符、用語などの補助資料を用意する必要がある。

また、音楽科のサブテーマである①自己との関わり、②他者との関わり、③生活や文化との関わり、を往還しながら子供が学ぶために、それぞれを関連付けるきっかけを子供が持てるような学びのプロセスをデザインしたい。例えば、「自分はこのようなイメージで演奏しているけれど、友達はどう感じるだろうか」という多面的な見方をすることによって、①自己との関わりと②他者との関わりを往還することにつながると考える。また、その曲で得た視点と他の曲とを比較し共通点や相違点を探したり、授業で得た視点で自分たちの生活や社会における音楽との関わりを考えたりするような、多角的な見方をすることによって、①や②が③生活や文化との関わりとの往還につながるだろう。子供が①

～③それぞれを関連付け、往還しながら学べるような学びのプロセスをデザインしたい。

③解決過程への批判的な振り返り

音楽科の研究テーマである「新たな音楽の価値を創る」とは、1(2)①で述べたように、一人一人の子供が持つ音楽観に基づく価値観で、自らの音楽の学びを価値付けることである。自分の学びに価値を付与できるかどうかは、この音楽観の深まり、豊かさによって決まる。音楽観を深め、豊かにするためには、子供が新たに出合った音楽を捉える際の視点や、他者との関わりを通して得た視点を、課題解決に向けて整理し、編みなおす過程が重要である。(2)で述べた学習プロセス通して「音楽科の本質的な学びを味わう」ことにより、自らの音楽の価値を問い直し、音楽観を更新していけるような振り返りを重点とした。

なお、下の表1は音楽科における省察的課題を①～③の視点で整理、分類したものである。

表1　省察的課題の支援の整理

	対象世界との関係 （認知的側面）	他者との関係 （社会的側面）	自己との関係 （情意的側面）
本質的かつ個別的な課題設定	本質的な課題設定。 「楽曲の特徴を捉えて表現する、聴く」	「友達はどのような課題設定をするだろう？」⇔自己との比較や気づき	自分の感じたことや考えたことをもとに、課題に気付く。個別の課題意識を持って取り組む。
多様な解決過程を支援する学習環境	音源、映像、楽譜、図、記号、作曲アプリなどのツール。	録音・録画、発表、意見交換、ペア・グループ活動を通じて協働的に学ぶ。	自己評価、他者からのフィードバック、ポートフォリオなどを活用して、振り返りと改善を行う。
解決過程への批判的な振り返り	課題の解決度を自己評価し、思考や行動を調整する。	友達の演奏や意見を参考にして自分の思考や表現を見直す。	自分の思考や表現を見直し、次の学習に生かす。

3．成果と課題

(1)研究の成果

実践を通して、子供がゆるやかなつながりを持って学び合えるような場が多く設けることができた。具体的には、演奏に取り組む練習時間に、自由な場所やツールを用いて子供同士が集まれるような環境をつくった。身体性を伴う学びの点では、特に低学年で、音楽に合わせて体を動かすことを中心に据えて、各題材で表現の工夫を考えられたことが成果として挙げられる。音楽観の更新の点では、大学のプロジェクトで国語科と教科横断的な授業の開発を行ったことによって、子供が他教科とのつながりを意識して学ぶことができた。

(2)今後の課題

今年度は、昨年度と比較して生活や社会とのつながりを意識した実践が十分に行えなかったと感じている。次年度以降は、子供が生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育てられるような取り組みを多く行いたい。また、年々子供同士が関わる環境を整えることの難しさを感じている。人間関係を考慮したグルーピングや、支援を必要とする子への配慮など、子供の実態に応じて最適な方法を引き続き考えていきたい。

【引用・参考文献】

・文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説 音楽編』東洋館出版社。

・樫下達也（2022）「音楽科教育の実践研究を問い直す」『音楽教育学』第 51 巻、第 2 号、76-77 ページ.

・菅裕（2022）「音楽科教育における自己調整およびメタ認知に関する研究動向」『音楽教育学』第 52 巻、第 1 号、36-45 ページ.

・マロックとトレヴァーセン編著，根ケ山光一・今川恭子ら監訳（2018）『絆の音楽性：つながりの基盤を求めて』音楽之友社.

・諏訪正樹研究室　SuwaLab　　https://metacog.jp/index.php/major-concepts/concept_1/

身体で味わう『陽気な船長』

－第４学年「せんりつのとくちょうをかんじとろう」の実践を通して－

忰山　恵

１．実践のポイント

(1)題材設定の趣旨

音楽科では、①音や音楽に対する心身の反応から得た、音楽を形づくっている要素とその働きの視点、②①を自己や他者との関係性の中で理解する視点という２つの視点で音楽を捉え、学んでいくことが音楽科の本質を味わうことであると考える。 本題材では２つの視点を以下のように考えた。

①　音楽を身体で感じて表現する

本題材で扱う『陽気な船長』は教科書オリジナルのリコーダー教材曲であり、多くの子が初めて聴く曲になるため、曲との出合わせ方が重要である。この曲で特に着目させたい音楽を形づくっている要素は次の３つである。

・旋律（音の高低）　・アーティキュレーション（スタッカートやレガート）　・音色の違い

これらを感じ取るために、体を使って表現することを大事にした。例えば、音の高さを手の上下の動きで表したり、スタッカートのリズムに合わせて踊ったりするなどである。曲から身体の自然な反応を引き出し、旋律の特徴を感じ取ることにつなげた。

②　音楽を自分や友達との関わりを通して理解する

曲の分析や解釈を通して自分なりの演奏の工夫を追究していく姿勢により表現力が磨かれる。②では、①で感じ取った旋律の特徴と『陽気な船長』という曲名から想像する様子やイメージから、この曲をどのように吹きたいかを考えた。そこでは、自分のこれまでの生活経験や知識、技能を活かすことが必要です。共に学ぶ友達と演奏を聴き合ったり、合わせたり、意見を交流したりすることで、自分の演奏を捉え直すきっかけにもなる。

(2)本質を味わう学びのプロセス

子供が本質を味わうために、問いを立ててそれを解決するプロセスを大事にした。

【本質Ⅰ】『陽気な船長』の旋律の特徴を「音楽的な視点」で身体的に捉えること。（聴き取ったこと）
本質的な問いの例：『陽気な船長』はどのような旋律の特徴があるだろう。
本質的な解決の例：旋律の動きや、音色の変化に着目して、スタッカートとレガートの違いを捉える。

【本質Ⅱ】本質Ⅰで捉えた旋律の特徴を、自己のイメージや感情、生活や文化、他者との関係を往還しながら理解すること。（感じ取ったこと）
本質的な問いの例：『陽気な船長』の旋律の特徴は、どのような感じがするだろう。
本質的な解決の例：「音が切れていて、弾む感じにきこえる」
「陽気な様子だから、船の上で楽しく歌ってそう」
「友達がスキップと言っているけれど、私にはジャンプしているように感じるな」

２．研究テーマとの関連

（1）本題材で味わう音楽科の本質

①本質Ⅰ(個別知識・技能を統合・包括する鍵概念)

本質Ⅰは、上位概念として「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」、下位概念として「心身の反応から捉えた音楽を形づくっている要素とその働き」である。

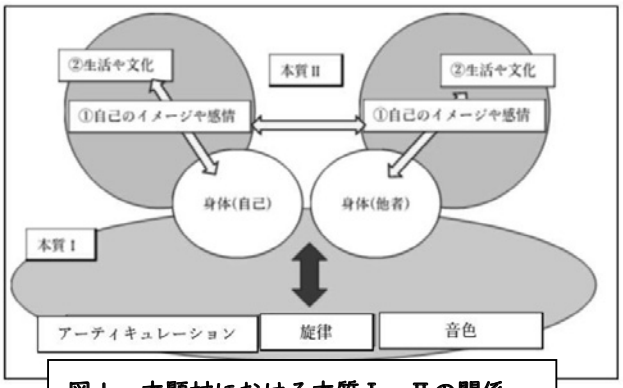
・本題材では、旋律の特徴を捉える音楽的な視点として①旋律（音の上がり下がり）、②アーティキュレーション（ス

タッカートとレガート)、③音色に焦点を当てている。特にスタッカートは「音を短く切る」という物理的な意味合いだけでなく、曲のイメージに合った音色で吹くことが大切である。例えば「陽気な船長」では、曲名から子供がイメージすると予想される明るい感じ、弾む感じ、躍動感などが出るような吹き方の工夫を考えられるような展開にしたい。そのためには、曲を聴いて船長の様子を想像したり、曲に合わせて体を動かしたり、聴こえた音色をオノマトペで表現したりといった様々な方法で感じたことを表現する活動が有効であると考える。そして、本質Ⅱの子供が思いや意図を持って演奏する活動につなげたい。

②本質Ⅱ(その教科等ならではの認識・表現の方法)

本質Ⅱは「①捉えたことを自己のイメージや感情、②捉えたことと生活や文化など、③捉えたことと他者、という三つの関係を往還しながら理解する(編みなおす)こと」である。①については本質Ⅰのところで述べたように、「スタッカート」は「音を短く切る」、「レガート」は「音を切らずにつなげる」という物理的な音の長さのみに着目するのではなく、曲名である「陽気な船長」からイメージする船長の様子を想像しながら、どのような音色で吹いたらよいかを考えて演奏しようとする子供の姿を目指したい。船長の様子をイメージする際は、これまでの生活経験から想像を働かせる必要があり、「陽気さ」をどのように捉え、どのように音に還元するかはこれまでの音楽経験を生かす必要があるため、①と②の往還が不可欠である。さらに、③他者との関係という点においては、友達の演奏をきくことで自身の演奏を見直したり、友達に意見をきくことによって気が付かなかった新たな視点に気付けたりといった、他者と一緒に演奏することが自身へのフィードバックにもつながると考える。さらに、自分が演奏している音を子供同士で聴き合って意見交換したり、タブレットＰＣで撮影して聴いたりすることで、自分の思いや意図に合った演奏ができているかを子供自身が振り返ることが大切である。

左図に、本題材の本質Ⅰ、Ⅱを図にまとめた。



図Ⅰ　本題材における本質Ⅰ、Ⅱの関係

（２）一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセス(省察的課題への支援)

①本質的かつ個別的な課題設定

本題材では、「旋律の特徴を感じ取って演奏する」ことを題材全体のねらいとしている。旋律の特徴をとらえる視点は様々あり、教科書ではそれらを系統的に学べるように教材配列を工夫している。本題材では、主に「旋律」の音の上がり下がりと、「音色」から特徴を捉えるが、当然その他の視点で捉えることも可能である。例えば、リズムの反復に着目したり、フレーズのまとまりを意識したりといった捉え方である。そのような視点も含めた上で、子供が自分なりに旋律の特徴を捉え、どのような演奏にしたいかという思いや意図を持てるような課題設定をしたい。

②多様な解決過程を支援する学習環境

本題材では、「旋律の特徴を感じ取って演奏する」ことを題材全体のねらいとしているが、ねらいに向かうプロセスは一様ではない。『陽気な船長』の例でいえば、本質Ⅰの旋律の特徴を捉える際に、曲を聴いて体を動かしながら捉えようとする子や、楽譜や動画などの視覚的な情報から音楽的な情報を得ようとする子もいるだろう。本質Ⅱに関しては、自分が捉えた旋律の特徴を言葉や絵、身体表現などで表したり、生活経験をもとに曲が表す様子を想像したり、友達と意見を交わしながら考えたりする子がいるだろう。それぞれの子供の思考の過程を予想し、解決を支援できる物理的な環境や授業の展開を工夫したい。

③解決過程への批判的な振り返り

本題材では、子供が「旋律の特徴を感じ取って演奏する」というねらいに向かうために、個々が選んだプロセスで課題解決をしていく。一方で、自分の演奏を客観的に聴くことはなかなか難しいものである。そこで、自分が聴いて

判断するだけでなく、友達と聴き合って意見を交換したり、PC の動画撮影で自分の演奏を見直したりといった、自分の演奏を客観的に振り返ることができる機会を設けたい。自分が目指したい演奏に近づいているか、音色、タンギング、リズムなど中心に、分析的に振り返ることと並行して、音や演奏に対する身体的な気付きや感覚の醸成も大事にしたい。

以上をもとに、本時における省察的課題についての支援を以下の表にまとめた。

表１　本時における省察的課題への支援

	対象世界との関係 （認知的側面）	他者との関係 （社会的側面）	自己との関係 （情意的側面）
本質的かつ 個別的な課題設定	本質的な課題設定。 『陽気な船長』の旋律の特徴とは？	「友達はどのような捉えをしているだろう」	旋律の特徴を身体的に捉える。 スタッカート、レガート、その他
多様な解決過程を支援する学習環境	「演奏音源」「演奏動画」「運指表」「楽譜」「音符・休符」「記号」など。	友達との教え合い、録音、撮影し合う、一緒に合わせる、先生にきくなど。	「タンギングをもっと練習しよう」 「指をもっと速く動かしてみよう」 「この吹き方で弾む感じが伝わるかな？」
解決過程への批判的な振り返り	課題の解決がどの程度できているかを振り返る。	友達とともに、友達の意見や演奏をもとに振り返る。	自分の解決過程を振り返り、思考や行動を調整する。

３．実践の実際

◎題材計画（全６時間）

第１次：旋律の特徴を生かして歌う『ゆかいに歩けば』・・・・・２時間

第２次：旋律の特徴に合った吹き方で演奏する『陽気な船長』・・２時間　※

第３次：旋律の特徴を感じ取りながら聴く『白鳥』・・・・・・・２時間

※今回は題材計画全６時間のうち第３時の内容を中心に記す。第２次の内容は以下の通りである。

・『陽気な船長』を聴き、旋律の特徴を感じ取る。
・旋律の特徴から楽曲にふさわしい演奏表現を考える。
・互いの演奏を聴き合い、よさや面白さを伝え合う。

(1)「どんな感じがする？」

まず『陽気な船長』という曲名を伏せて聴いた。子供たちには次のような反応が見られた。

・音の高さの上下を手や上半身の動きで表している子。（体の動き）
・「カクカク」「トロ～ン」している。（オノマトペ）
・「カッコッカッコッ」と舌を鳴らしてリズムをとる。

(2)「どんな様子が思い浮かぶかな？」⇔「そればなぜだろう」

次に、『陽気な船長』という曲名を示した。改めて曲を聴き「どんな様子が 思い浮かぶか」、「それはなぜか」、を旋律の特徴から考えた。(1)で感じたこととも結びつけながら考えた。

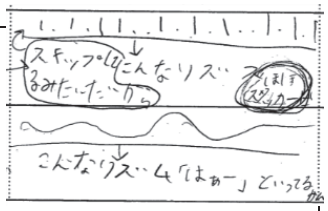
アの部分：元気、お酒を飲んでいる、船酔い

➡スキップは「スタッカート」だから。　➡スキップしながら吹く。

イの部分：波乗り、波がある、昼寝している

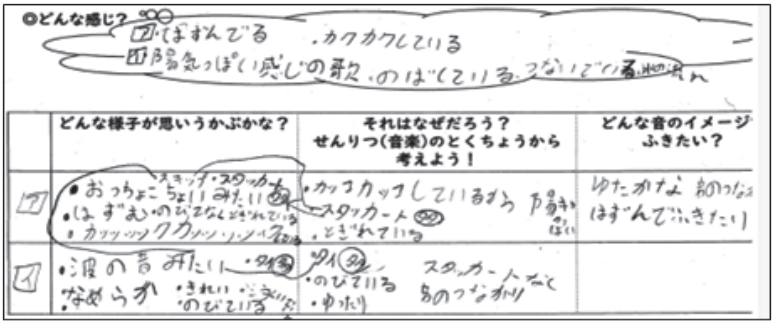
➡泳ぐ、波は「音と音のすき間が大きい」から。➡伸ばしている部分は日向ぼっこ。

ワークシートには、言葉だけでなく旋律の動きを点や線などで表 現したり、絵を描いたりする様子が見られた。



(3)「どんな音のイメージでふきたい？」

次に、曲から想像した様子や気付いた旋律の特徴を踏まえて吹き方の工夫を考えた。イメージした様子を旋律の特徴と結び付けて演奏の工夫を考えている姿が見られた。ワークシートの枠組みも子供の思考の整理に一定の効果があったと感じた。



	どんな様子が思いうかぶかな？	それはなぜだろう？ せんりつ(音楽)のとくちょうから考えよう！	どんな音のイメージふきたい？
ア	・おっちょこちょいみたい ・はずむ ・カッツッツ	・カッカッカッしているから ・スタッカート ・とぎれている	ゆたかな はずんでふきたい
イ	・波の音みたい なめらか ・きれい ・のびている	・のびている ・ゆったり スタッカートなし	

4．まとめ

(1)成果

本質Ⅰを味わう姿について

◎「陽気な船長」の旋律を聴いて、音高の上下をを手や上半身の動きで表したり、オノマトペや図、絵などで表したり、様々な表現で旋律の特徴を捉える姿が見られた。

本質Ⅱを味わう姿について

本質Ⅱは「①捉えたことと自己のイメージや感情、②捉えたことと生活や文化など、③捉えたことと他者、という三つの関係を往還しながら理解する(編みなおす)こと」であるが、①　⇔　②　を往還する姿が見られた。例えば、「陽気な船長」という曲名から様子をイメージし、「旋律の特徴」と結びつける発言や記述である。

ア：元気、お酒を飲んでいる、船酔い

➡スキップは「スタッカート」だから

➡スキップしながら吹く

イ：波乗り、波がある、昼寝している

➡泳ぐ、波は「音と音のすき間が大きい」から。伸ばしている部分は日向ぼっこ。

(2)課題

全体の課題として、①②　⇔　③　の往還　場の設定の難しさが挙げられる。リコーダーの練習場面において多様な問題解決過程があり（練習したい人、ある程度吹けて友達と合わせたい人、友達に聴いてほしい人など)、ペアで聴き合う時間を設けたが、あまり効果的に機能していなかった。楽譜通りに吹けるようになることで精いっぱいで、演奏の工夫まで考える余裕がない子もいた。後半のリコーダーを練習する場面では、技能差や必要な支援が子供によって異なると考えたため、運指標を貼ったりモニターで階名の書き込みながら教えたりなどを行った。ペアやグループを指定するのではなく、自由に子どもたちに練習させた。同じ班の子や課題が似ている子同士が集まって吹いている様子もあれば、黙々と個人練習をしている子もいた。個人練習をしている子に他者との関わりをもたせたいという思いからペアで聴き合う時間を設定したが、同じ問題解決過程の子同士が集まったほうが効果的であったと感じた。

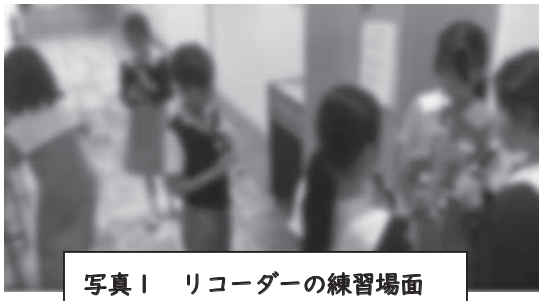


写真１　リコーダーの練習場面